

1999年度第1回コロキウムについて

著者	萩原 弘子
引用	女性学研究. 2000, 8, p.1-2
URL	http://hdl.handle.net/10466/10057

1999年度第1回コロキウムについて

美術評論家ルーシー・リップードのアメリカ美術界における活発な評論活動は、すでに30年を越える。彼女の発言はアメリカの代表的なフェミニスト美術評論として知られているが、そのほかにも評論の対象とする美術領域は多岐にわたる。またフェミニストであるというだけでは彼女の立場を説明したことにはならず、社会主義者であり、文化活動家であり、またアメリカの対外的な帝国主義的軍事行動にはっきりと抗議する市民的レベルでもある。

コロキウムのテーマを、「1970年代アメリカのフェミニスト・アート批評におけるルーシー・リップードの位置」としたのは、リップードの多岐にわたる評論活動に焦点をあて、その矛盾する面、一貫する点を洗いだし、70年代以降のアメリカの美術評論とフェミニズムの流れのなかに位置づけることをめざしてのことである。リップードには多くの著作があり、一度のコロキウムでその課題を果たせるわけもないので、今回は彼女の矛盾する面を明らかにしようというのが、企画者である私が考えたことであった。視覚表現の分野における文化研究に携わってきた私にとって、リップードは10数年来解けない謎であった。一方で芸術表現の規範くずしを追求するラディカリズムや、女のからだの視覚表現に関する先鋭的な分析があるかと思えば、他方では困惑するほどに単純きわまりないエッセンシャルリズムを展開している。この矛盾をどうとらえればよいのか。リップードが70年代のフェミニスト・アート・シーンで占めた位置の大きさ、果たした仕事の量の多さと内容の重さを考えれば、リップードの矛盾はなにほどこかアメリカのフェミニズムの抱える矛盾でもあるのでは、というのが私が当初推測したことである。後掲の「討論のまとめ」にあるように、結局はリップードの矛盾を考えるなかで、一貫する点についても見えてきたのは収穫であった。

発表は、まず京都精華大学のレベッカ・ジェニスンさんから、76年刊行のよく知られるフェミニスト・アート批評の本 *From the Center* と、その20年後に行なわれたリップードについて(?)の奇妙な展覧会をとりあげて、発表していただいた。次に萩原から、1983年の著作 *Overlay* に見るリ

リッパードのエッセンシャルイズムや未開崇拜の傾向について、40分ほどの分析を行なった。最後の、城西国際大学のリサ・ブルームさんの発表は、アメリカのさまざまな民族的出自をもつアーティストの作品を論じた90年の著作 *Mixed Blessings* に関するもので、その刊行以前に美術界で行なわれていた作家の人種・民族性についての議論に言及しながら、同書の意味を分析していただいた。83年の著作は77年に準備されたもの、90年の著作は70年代に始まる多元的文化社会アメリカという認識に関わるものなので、いずれも70年代に根をもつ書物である。ゲストお二人の発表は、どちらも60分ほどである。この発表の順は、リッパード著作の刊行の順に従ったものだが、ジェニスンさんの発表は、最も近年の展覧会についての分析も含むため、この論文集では3番目に置いた。発表のあとに、参加者全員で討論を行なった。

ブルームさんは、美術史、文化研究、ジェンダー研究の分野で仕事をしている方であり、ジェニスンさんは、日本の女性文学にも西洋フェミニスト美術史研究にも通じた方である。このコロキウムのそもそもの計画は1997年頃にさかのぼり、ブルームさん、ジェニスンさんのお二人に相談しながら、2年近くの準備を重ねて実現した。準備の段階からずっとおつきあいいただいたお二人に、心から感謝している。

コロキウム参加者には、事前に次の2点の論文を参考文献として読んだうえで参加していただくようお願いした。ひとつは、Thaila Gouma-Peterson and Patricia Mathews, 'The Feminist Art Critique of Art History,' *Art Bulletin*, 69 (1987 September) であり、もうひとつは萩原の論文「母なる神 — 1970年代「女性神（ゴッデス）アート」のエッセンシャルイズム」（『現代思想』1998年4月号）である。

なおコロキウムは発表、討論のすべてを英語で行ない、時間と人手の関係上、通訳はいっさいつけなかった。ここに収録した論文は、コロキウムでの発表をもとに執筆されている。ブルームさんとジェニスンさんの論文は英語で書いていただいたものを、萩原が翻訳した。

(萩原弘子)